

『心月輪秘釈』における三色について

小宮 俊海

一 はじめに

「木を見て、森を見ず。」仏教学のみならず多くの文献学研究は方法論として、しばしば訓詁学的研究が中心となり、まるで重箱の隅をつつくかの如く、蛸壺化した専門的内容について些末な議論を繰り返すという危険性常常に孕んでいる。こういった状況を揶揄して文頭のような慣用句が社会から研究者に対し投げかけられる場面を目にすることがある。これらの指摘は文献学的研究という手法や研究組織、研究者の体質といったことに起因しているのかもしれない。

確かに研究者側も常に社会に意識を向けるべきであるという指摘も一理ある。ましてや真言宗の伝統教学という立場を考えた場合、宗教的信仰に基づく学問であると自認することが前提となるため、宗教者・仏教者・真言行者としてその目的が自身の自己実現のみに留まらず、広く社会の人々へ寄与するものである必要性が生じてく

るのも確かである。真言宗の伝統教学のあり方について近年、加藤精一師は以下のように述べている。

私たちが弘法大師の教理に関する著作を読む場合、それらの後世の末釈をまず読みますと、字句の意味についての研究が目立って多く、大師の広々とした思索の研究や真言密教の仏教思想上の位置といった面は不足しているように思われます。これでは、弘法大師が苦心されたり工夫された部分や、大師の構想力のすばらしさ、証明の確かさなどについては、わからずじまいになっていく恐れがあります。（傍線筆者、以下同）¹

祖師の思想を学ぶことが宗学の本義であり、その思想がいかなるものであるかということを直接的に広く把握する重要性について指摘するものである。そして、後世の末釈ばかりに終始する研究は先述のような状況が生じてしまうということであろう。しかし、祖師の思想を正確に把握していく作業の一環として後世の末釈や現存する諸写本などの先徳が残した教学活動の産物が大いに役立つのではないかと稿者は考える。

本稿は、根来・新義門流において真言宗中興の祖と仰がれる興教大師覚鑑（一〇九五―一一四三）（以下、覚鑑）の『心月輪秘釈』一卷（以下、『秘釈』）における三色という概念を検討し、各写本や版本といった現存資料の再確認の重要性や、翻刻校訂本文の再検討、本文校訂により生じる解釈への影響、後世の著作における本文引用からみえるものなどについて検討し、覚鑑の思想について迫る作業であると同時に、それらが中性院俊音房頼瑜（一二二六―一三〇四）（以下、頼瑜）をはじめとする根来・新義門流においていかに脈々と教学を継承してきたのかということについて思いを馳せてみたい。

二 『心月輪秘釈』について

覚鑑の『秘釈』の本文内容の解釈について取り上げる前に、現在定本として流布している翻刻校訂本文と現存

する諸写本との関係、また校訂本文をもとに展開した研究成果についてみていきたい。そして、それらに基づいて校訂本文を今一度検討し、本文解釈への影響関係を考察していくこととする。

二・一 諸写本と現行翻刻校訂本文について

現在、覚鑊の著作を研究する際に本文として用いるものに『興教大師全集』（以下、『興大全』）をあげることができる。『秘釈』は、他にも『大正蔵』七九卷に収載されているが、『興大全』巻下に収載されており、全文を確認することが可能となっている。そこで、『興大全』本を翻刻校訂する際に用いられた写本の奥書を確認しておきたい。

梅尾高山寺所蔵本を以て底本と為し、観智院所蔵杲宝僧都所持本等を対校す。其の奥書は左の如し。

高山寺本

久安五年正月三十日、子の時許り、写し了ぬ。高野往生院播州聖人房にて。

宝亀院本

永正十一年卯月十九日、正智院本を以て書写し了ぬ。金剛仏子長祐^②。

このように、高山寺本を底本に観智院本や宝亀院本などを対校本として用いられていることがわかる。また、奥書の末尾には以下のような記述がみられる。

智出版、左の識語有り。

右の此の書の中に、入壇以後の文義処々相ひ雑ふ。若し師伝を受けざる者は、所引の本文を読むこと莫れ。凡そ仏經を案じ、師説を聞くに本經本教の正文に於ては、私記鈔出の中に在りと雖も、未だ本文を読まずの

輩は、一字をも読むべからざるなり。鈔する者、見る者、共に阿鼻に墮し、同じく泥梨に入らむ、と云々。⁽³⁾

ここから、先にあげた写本の他に智山版と呼ばれる版本も対校に加えていたことがわかる。そして、この識語は『大正蔵』本にも同様の文が付されており、智山版のみならず、他本にも存在する記述と考えることができる。⁽⁴⁾そこで、『大正蔵』本の翻刻校訂に用いられたものをみてみると、底本を天明三年版本に、対校本(甲)に高野山金剛三昧院本を用いたとされている。⁽⁵⁾このことから『興大全』という智山版と『大正蔵』本の底本として用いられた天明三年版本は何らかの関係を指摘することができる。

その後、覺鑊著作の多くの写本を類聚し、影印版として公刊されたものに『興教大師覺鑊写本集成』(以下、『写本集成』)をあげることができる。この『写本集成』の凡例よりその編纂方針を窺うことができる。

一、本集成は、興教大師覺鑊上人八百五十年御遠忌を記念し、興教大師覺鑊上人の諸著作の現存古写本の中から、宗義・学術資料として貴重な文献を精選して全冊を影印し、解題を付けて公刊するものである。

(中略)

一、所収本は現存する写本の中で、古写本・善本・貴重本の採用に努めた。⁽⁶⁾

この中にも『秘釈』が収載されており、高山寺本二本と醍醐寺三宝院本二本の書誌情報を紹介している。そして、高山寺本二本の全文影印をそれぞれみることができる。高山寺本の書誌情報を以下にあげると、

◎ 心月輪秘釈

① 京都府・高山寺蔵

② 卷子本、一卷。④ 縦二六・八センチ。

⑤ 院政期写。

⑦外題・内題共に「心月輪秘釈」、尾題は「心月輪秘釈一卷」。
尾題後に次の文がある。

右此書中、入壇以後文所々相雜。若不受師伝者、莫読所引之本文。凡案仏經、聞師説於本經本教正文者、雖有秘私記取鈔出中、未読本文之輩不可読一字也。抄者見者、共墮阿鼻同入涅槃
この後に「心月輪秘釈」とある。

◎心月輪秘釈

①京都府・高山寺蔵

②折丁装、一帖。③楷書。書き入れなし。④縦一七・六センチ×横一四・〇センチ。頁内行数七行×行内
字数一三字。

⑤院政期・久安五年（一一四九）写。

⑦外題は「心月輪秘釈」、内題は「夫此観者」。「齊食略観」と合本。⑧完本・D。
奥書は次のとおりである。

久安五年正月三十日子時許了

高野往生院播州聖人房ニテ

ここにあげられている高山寺蔵卷子本（以下、卷子本）は『興大全』本にいう智山版の識語とほぼ同様の文が
尾題後に記述されていることがわかる。また、続いてあげられる高山寺蔵折丁装本（以下、折本）の奥書を見る
と『興大全』本と奥書が一致していることがわかる。このことから『興大全』本の翻刻校訂に用いられた底本は
この折本を指していると考えることができる。高山寺蔵のこれら二本とともに院政期の写本であり、折本にいた

つては覺鑊滅後六年後という時代の古本であり、本文も損傷の少ない善本である。稿者は、この二本の本文内容に不一致する語句を見出した。これについては、『興大全』本においても『大正蔵』本においても校勘が言及されていない。その該当箇所はそれぞれ卷子本【影印1】「言眞実者。法身法爾之三密。性仏性然之四曼。」⁽⁸⁾折本【影印2】「言眞実者。法身法爾之三密。性仏性然之四曼。」⁽⁹⁾となっている。また、『大正蔵』本も、「言眞実者。法身法爾之三密。性仏性然之四曼。」⁽¹⁰⁾となっており、脚注が付されていないことから、天明三年版本、金剛三昧院本ともに「三色」となっていたと思われる。しかし、詳しくは後述するが『興大全』本においては、底本として用

要候者、一心縁起之色相諸識所變之歟、像言眞實者、法身法尔之三密、性佛性然之四曼、所以月性常住、超過四相、難用廣大周遍十方、徧德於萬種、滿益於六品、色相既具、功德

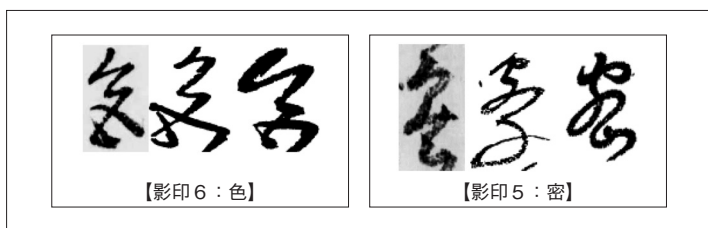
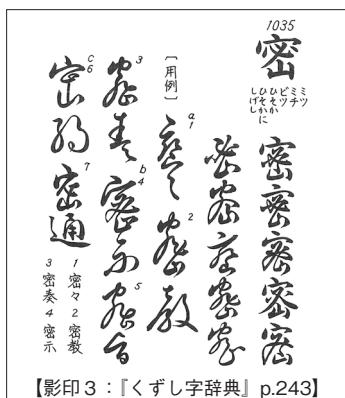
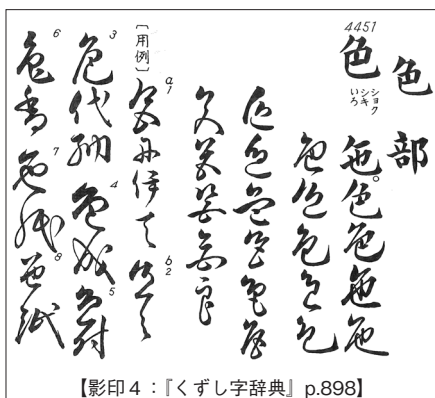
【影印1：卷子本】

原起之色相諸識所變之歟、像言眞實者、法身法尔之三密、性佛性然之四曼、所以月性常住、超過四相、難用廣大周遍十方、徧德於萬種、滿益於六品、色相既具、功德

【影印2：折本】

いた折本が「三色」となっているにも関わらず、校訂本文が「三密」となっているという不審がある。本稿はこれらの異同に焦点を当て、その後の学匠が用いた『秘釈』について検討し、『秘釈』本文校訂の一案を提示できればと考えるものである。

写本を書写する際に多くの誤写が認められることは一般的に指摘されるが、そのなかでも草書体の字形の類似という理由から誤写の可能性の高い文字はいくつか存在する。「密」と「色」も



その一つであり、これらが混同されることも有り得る。ここに児玉幸多編『くずし字用例辞典』^①（以下、『くずし字辞典』）や東京大学史料編纂所ホームページからのインターネットデータベース検索^②により類似する字形をあげてみると【影印3】から【影印6】までとなる。これらを参考に考えると、「密」と「色」を混同し、誤写をする可能性がないとは言いきれない。しかし、ここでは誤写による語句の異同により、本文解釈にも影響を及ぼすものと考ええる。

また、ここに報告する事例は翻刻校訂本文が定本として流布することにより、その後の研究に与える影響がみられるものである。

翻刻校訂本文が公刊されることにより、飛躍的に本文研究が進展することは文献学研究においては周知であるが、一度定本が確定することにより、原本資料について看過されることもしばしば起る得ることである。定本というものの性質上、そも

そも校訂者の思惑が介在するという前提に立たなければならぬであろうし、著作者の思想に迫る上でも、現存する原本資料に立ち返る姿勢は保つべきであろう。

『興大全』において覚鑊の著作の翻刻校訂本文が提供されたことにより、それらを訓読し、訳注を施す作業が進められた。それらの成果が『興教大師撰述集』（以下、『興大撰』）ならびに『興教大師著作全集』（『興著全』）である。それらの凡例からそれぞれの立場を今一度確認したい。『興大撰』は、「一、中野達慧統輯・富田敦純校訂『興教大師全集』を底本とし、その他の写本、資料を参考とする。全集本を改めた箇所も少なくない。」¹³とあり、『興大全』を底本に用いていることがわかる。

また、同様に『興著全』も以下のように「一、底本は、中野達慧統輯・富田敦純校訂『興教大師全集』を使用し、一部内容により収載順序を改め、その他の写本・版本を参照した。（以下、略）」¹⁴と、『興大全』の本文に基づいて訓読がなされていることがわかる。両書ともに各写本や版本を対校本として用い、『興大全』本の本文を改めた箇所もあるようだが、今回の該当箇所に関しては、特に言及はなく、『興大全』本の本文を踏襲していることがわかる。

二・二 本文解釈について

それでは、具体的に先にあげた該当箇所が『秘釈』のなかでどのような文脈で説かれているのかをみていく。まず、『興大全』本の本文からみていくと、

問、其意如何。答夫心理離色相。色相非心理者、可知遮情遣迷之意。非是表德顯実之義。色相有二。所謂真妄仮実是也。今所絶離、是遮妄仮。非遣真実。言妄仮者、一心縁起之色相、諸識所変之影像。言真実者、

法身・法爾之三密、性仏・性然之四曼。所以自性常住、超過四相、体用广大、周遍十方。備德於万種、（中略）色心俱本有、誰生能所之別執矣。¹⁵

という翻刻がなされており、これらを『興大撰』や『興著全』の訓読をみると、

問ふ。次の意いかんが故に心月の二名、同じくこれ一法なるか。答ふ。心月不二にして、月心すなはち一なるをもつての故に。この故に『経』に云く、「すなはちこれ心、心すなはちこれ月」と文り。問ふ。その意いかん。答ふ。それ心理は、色相に二あり。いはゆる真妄・仮実、これなり。今、絶離するところは、これ妄仮を遮するなり。真実を遣るにはあらず。妄仮といふは、一心縁起の色相、諸識所変の影像なり。真実といふは、法身・法爾の三密、法仏・性然の四曼なり。ゆへに自性常住にして四相を超過し、体用广大にして、十方に周遍せり。（中略）色相ともに本有なり、誰か能所の別執を生ぜん。事理同じく深秘なり、あに優劣の異見を起さんや。色心不二なり、これを諸仏内証の法門と名づく。性相即一なり、これを四身自覚の境界と称す。¹⁶

というようになる。菩提心を象徴する月輪が、その本質として同体であるならば、なぜに色相が異なるのかという疑問に対し、色相には妄仮と真実の二種の見方があり、前者は顕教的なものの見方であり、後者は真言密教独自の真実としてのものの見方であるという。これにより実際に月輪という色相があるといえども、顕教的な一心縁起による色相や、諸識の影像としての色相ではなく、法身大日如来の顕現としての真実の色相をみることができる。

そして、下線部の該当個所が法身大日如来としての本有の三密であるのか、三色であるのかというところで本文解釈にも相違が生じてくるものと考えられる。

三 三密と三色について

前項において、諸写本における本文の異同関係、さらには翻刻校訂本文の確定への経緯といったことについて検討を加えた。ここでは、具体的に「三密」と「三色」との異同により本文解釈へいかなる影響が生じるのかということについて、これらの語句の意味するところについて考えてみたい。

三・一 三密について

ここで今一度、「三密」についてその意味するところを確認する必要がある。三密とは、いうまでもなく、心意の三密のことを指している。真言密教の最大の目的ともいえる即身成仏について、それを実現させるために必要不可欠な実践行は、三密行の修行である。具体的には衆生としての自身の身体的活動と言語的活動と精神的活動という全活動、すなわち三業を仏である法身大日如来の全活動としての三密へと昇華させ、自身と仏とが加持感応し、相応することである。これら三密行について宗祖弘法大師空海（七七四～八三五入定）（以下、空海）は『即身成仏義』において以下のように述べている。

「三密加持すれば速疾に顕わる」とは、謂く、三密とは一には身密、二には語密、三には心密なり。法仏の三密は甚深微細にして等覺十地も見聞すること能わず、故に三密と曰ふ。（中略）若し真言行人有りて此の義を観察して、手に印契を作し、口に真言を誦じ、心三摩地に住すれば、三密相応して加持するが故に、早く大悉地を得。¹⁷

このように三密行とは、具体的には手に印契を結び、口に真言を誦じ、意を三摩地に住することであると説明

している。この三密については、『秘釈』においても以下のように説明されている。

三に三密の義。謂く月輪とは、一には三秘密の諸仏、二には一平等の万法なり。万徳の衆善は三等の所生、三密の一心は諸法の能摂なり。謂く此の月輪、白淨の色を顯し、円満の形を備へ、出入の行を表し、去來の相を示す。之を色の義と謂ふ。故に身密と名づく。円明満月の名言、𑖀字𑖅字の声字、是れを語密に配す。摂持不乱の理を具し、明照破暗の意を含めり。是れを心密に属す。¹⁸⁾

このように、潔白な月輪といった色相が生じるものは如來の身体としての身密と考えられ、月輪といった名称や、𑖀字𑖅字といった文字やすべての音声としての真言が口密と考えられている。そして、そこに生じる理として意味内容の変化が意密に当たると考えることができる¹⁹⁾と説明する。さらに、伝空海『秘藏記』に説かれる以下の文を用い、三密の内容について説明を加えている。

故に文に云く、「三密をもつて一切の諸法を摂し、一切の色を身に摂す。身は即ち印契、色を見るなり。一切の声を口に摂す。語は即ち真言、音を聞くなり。一切の理を心に摂す。心は即ち本尊、實相に表す。是の三密は平等平等にして、一切処に遍せり。²⁰⁾（以下略）

というように、三密はそれぞれに平等であり、一具であると考えられている。そして、法身大日如來の顯現として普遍的にすべての側面に達していると理解することができるのである。

三・二 三色について

さて、「三密」の意味するところについて『秘釈』に説かれる文から考えたわけであるが、折本等の該当個所により、本文を「三色」と置き換えた場合にはいかなる解釈が考えられるであろうか。三色についても三密と同

じく空海の文にその根柢を求めることができる。『声字実相義』において以下のように、

頌にいわく、

顕形表等の色あり、内外の依正に具す、法然と随縁と有り、能く迷い亦た能く悟る。釈して曰く、頌の文を四つに分つ。初の一句は色の差別を挙げ、次の句は内外の色互に依正となることを表し、三は法爾・随縁の二種の所生を顕し、四は此の種々の色、愚に於ては毒となり、智に於ては薬となることを説く。⁽²¹⁾

ここには、色相が生じる過程を四句の偈頌によつて四つの側面より説明している。ここで特に注目すべき点は、色の差別相を示す一句目と、色が生じるあり方として法爾と随縁という二種があるという三句目であろう。まず、色の差別を説明するのに以下のように続けている。

初の句に顕形表等の色とは、此れに三つの別あり。一には顕色、二には形色、三には表色なり。一に顕色とは五大の色是れなり。法相家には四種の色を説きて黒色を立てず。『大日経』に依らば五大に色を立つ。五大の色とは、一には黄色、二には白色、三には赤色、四には黒色、五には青色なり。是の五大の色を名づけて顕色となす。⁽²²⁾

というように、色には顕色と形色と表色という三種に分けて説明することができるという。そして、顕色とは世界を構成する性質とされる地水火風空の五大を象徴する色であるという。これはこの世界に色彩として顕現した色を差しており、現代語の「色」^{イロ}に最も近い概念と考えることができる。そして、二つ目の形色については、

次に形色とは、謂はく長短龜細正不正高下是れなり。又た方円三角半月等是れなり。⁽²³⁾

と、形状を示すものであることがわかる。物質としての色が、空間にいかなる形状で顕現しているのかという側面を形色というかたちで説明することができるのである。

最後に、表色の説明については以下のようにある。

三に表色とは、謂く取捨屈伸・行住坐臥是れなり。又た即ち此の積集せる色の生滅相続することは、変異の因に由る。先に生ずる処に於て復た重ねて生ぜずして異処に転ず。或ひは無間、或ひは有間、或ひは近、或ひは遠、差別して生ずるなり。或ひは即ち此の処に於て変異して生ずる是れなり。又た業用為作の転動差別、是れを表色と名づく。²⁴⁾

以上、この世界に運動や活動として表出する事柄について、それらを表色と呼称し、色の一側面であると認識していることがわかる。

このように色や姿形や運動といった実際に目にみえる世界をいかに法身大日如來の顕現と捉えることができるのかという課題について色を三種に分けて定義することにより理解しようとしていることがわかる。そして、これらが法身大日如來の本来的なあり方すなわち本有としての立場である「法爾」と、そこから生み出された結果として表出するあり方、すなわち「隨縁」という二種の見方が色にはあると三句目で説明していることがわかる。これら三色について、空海以降の学匠はいかに理解してきたのであろうか。参考として覺鑒より時代は降るが、南北朝期の東寺觀智院杲宝（一二三〇六―一三六二）（以下、杲宝）が『大日經疏鈔』のなかで以下のように述べている。

四重海会の中的一切諸の聖尊は則ち毘盧遮那普門の身なり。亦た是れ衆生本覺の自在成就の身なるが故に、内心大我と云うなり。之れを以て之れを言はば、下に明す所の顕形表の三色の中に、我不可得とは、其の実義は則ち彼の三色を以て、普門曼荼羅と為す意なり。下に至りて之を悉くすべし。²⁵⁾

このように、衆生としての自身の内に本来的に有している法身大日如來が顕形表の三色で顕現したものが普門

すなわちこの世界全体がそのまま曼荼羅世界となるのであるというのである。そしてさらに『大日經疏鈔』では、先の『声字実相義』の説明を『大日經』本文と照らし合わせるかたちで詳しく説明している。

広く之れを言はば、顕色に十三種有り。謂く、青と黄と赤と白と（本色）、影と光と明と闇と雲と煙と塵と霧と及び空一顕色是れなり。形色に十種有り。謂く、長と短と方と円と麤と細と正と不正と高と下と是れなり。表色に八種有り。取と捨と屈と伸と行と住と坐と臥是れなり。今の此の『經』の中には顕色に四顕色の外に黒色を立つ。十種形色の外に三角と半月と団形を立つ²⁶。

このように、『声字実相義』では顕色には十三種類、形色には十種類、表色には八種類があげられていたのであるが、『大日經』にはそれ以外のいくつかがあげられていることを指摘している。そしてまた、

能く之れを言はば、一切の顕と形と表色の中に我相を計すべきなり。問ふ、今の顕形表に於て我を計すとは、其の義如何。答ふ、一切の外道皆な内心に繋著す。之れを以て実と為す。而も心の実相を了ぜざるが故に、只だ一相を見て妄計を生ず。心体は青なり、黄なり。乃至、男女の相の如しと之れを計して、各一相を執し余相を廃す。皆な是れ我見の相なり²⁷。

と、衆生である我々は、我執・我見にとらわれているために色相に現出したある側面のみに固執し、妄仮の色相であることに気付くことができないのだという。これにより多くの衆生は外道に墜し、実相をありありとみることができないのであると説明するのである。

ここに杲宝説を参考にあげるのは、『興大全』において杲宝本を対校本として用いていることによる。しかし、『大日經疏鈔』においては直接『秘釈』について言及する箇所は管見では見出すことはできない。

四 頼瑠や新義諸師の引用する『心月輪秘釈』について

前項において、「三密」と「三色」の内容について検討を加えたが、ここでは『興大全』本とは違う本文を有する写本が覚鑠以降の学匠へ引き継がれていった事例を具体的にみていきたい。特に覚鑠を先徳と仰ぎ、新義真言教学を大成したとされる頼瑠について取り上げる。頼瑠は多数の著作を残したが、多岐にわたる著作のなかで『秘釈』を用いて解釈する箇所が散見される。

また、頼瑠以降の根来・新義門流の学僧たちへ伝わった『秘釈』についても先の異同箇所がどちらであったのかを考えることのできる資料を見出すことができる。

四・一 『菩提心論初心鈔』

覚鑠以降の学匠がいかに『秘釈』の文を理解してきたのかを考える上で、頼瑠を取り上げるのは自身の多くの著作の中で『秘釈』を用い解釈している場面が見受けられるからである。『菩提心論』の逐語釈である『菩提心論初心鈔』において以下の文をみることができる。

次に当体とは本有の菩提心の形体、実に月輪の姿なり。諸の顕教には心所に色形無し。一乗教は一心縁起の色を談じ、三乗は諸識所変の影像と云ふ。今の宗意は菩提心の形は或ひは蓮花、或ひは月輪にて有りと云ふなり。法法仏法法法爾の三色を明かす故なり。「形、月輪の如し」の形の字良く故有るなり。法身の色形の有無之れを思ふべし。已上性徳の菩提心の行相なり。²⁸

このように、菩提心の色相が月輪であることに關して、『秘釈』の解釈によって理解していることがわかる。『秘

『釈』本文の引用ではないが、菩提心がそのまま月輪であるという色相についての理解を先の『秘釈』の取意文をあげて、「一心縁起の色相」を一乗教すなわち空海の十住心思想でいうところの第八一道無為住心、第九極無自性住心に、「諸識所変の影像」を三乗教すなわち第六他縁大乘住心、第七覺心不生住心といった位置付けとして理解していることがわかる。

四・二 『菩提心論愚草』

同じく頼瑠の談義書である『愚草』類のなかに『菩提心論愚草』がある。このなかにも先の『菩提心論初心鈔』同様に『秘釈』の文への理解を示している。そしてここでは実際に『秘釈』本文もすぐ後に引用されているため、先の『菩提心論初心鈔』の理解が『秘釈』の取意文であることが確かめられるのである。

若し法位の六大に依るに識大は色形無きなり。之の類は色心不二の義に約すは顕教之れを談じて一色一香無非中道等と云ふ。故に六大各別の位、識大色形有ること無きなり。法位の識大に色形無しとは、全く顕乗の談に同ずるにあらずや。答ふ。色心不二の義理智相即の言は顕家に似たりと雖も其の意大いに異なり。例へ彼の一乗の一心縁起の義、三乗の諸識所変の談異なるが如し。今の宗は簡びて二義を得。更に色心不二の智を立つ。寧ぞ顕家の義に同じや。²⁹⁾

このように、六大のうちの識大に色相を認めるか否かという議論に対し、色相の表出としての理解に顕教と密教では浅深が現前とあることを主帳していることがわかる。つまるところ物質と精神とは密教の立場からみた場合、決して分離することなく、融合することが可能であり、それらが根拠となつて即身成仏が成立すると考えられているのである。そして続いて、

故に『秘釈』の具文に云く、「(中略)一心縁起の色相、諸識所変の影像なり。真実と言ふは、法身法爾の三色、性仏性然の四曼なり。(以下略)³⁰⁾

というように、先に『秘釈』本文に諸本によって異同が認められた該当箇所が引用されている。ここで、注目したいのがその該当箇所が「三色」となっている点である。頼瑠は数種類の著作にわたって『秘釈』を引用するが、この箇所を重要視していたことが理解できる。

四・三 『顕密問答鈔』

頼瑠が『秘釈』を重視し、数種の著作に引用することは既に述べたが、顕教と密教の相違点を述べることを目的とした『顕密問答鈔』においても引用されている。

問ふ。菩提心とは顕には自性清浄心と云ひ、密には心月輪と名づく。爾らば、心月輪の法喩の分別、如何ん。答ふ、先徳の『秘釈』に云く、「(中略)妄仮とは一心縁起の色相、諸識所変の影像なり。真実と言ふは法身法爾の三色、性仏性然の四曼なり。(以下略)³¹⁾

ここには、菩提心を説明する上で、顕教では自性清浄心といい、密教ではより具体的なかたちで月輪という法喩を用いている。これらをいかに説明するのかといった問題について、やはり『秘釈』を用いて説明するのである。そして、密教の立場として、本有の法身大日如来が現出するあり方として三種類の色相があるのだという理解を示していることがわかる。

四・四 『大疏百條第三重』関係

頼瑠が用いる『秘釈』は、諸本異同が認められる該当箇所については三色として理解していたことが確認できたが、さらに頼瑠以降の根来・新義門流の学僧も該当箇所を三色として理解していたことが以下の記述からわかる。

『心月輪秘釈』に云はく、〈先徳御釈〉「それ心理は色相を離れたり。色相は心理に非ずとは、知るべし、遮情遣迷の意なり。（中略）妄仮と言ふは、一心縁起の色相、諸識所変の影像なり。真実と言ふは、法身法爾の三色、性仏性然の四曼（乃至）色相既に万徳を具して一如なり。（以下略）⁽³²⁾

これは、根来学頭、中性院第四世聖憲（二三〇七―一三九二）（以下、聖憲）が類聚した根来・新義門流の論義である『大疏百條第三重』における「心法色形」という論義に引用される『秘釈』の文である。ここでもやはり該当箇所は三色であることがわかる。しかし、「心法色形」の末尾に記述されるこの『秘釈』の引用については、どうやら聖憲類聚時にもともとあったものではなく、後に何者かによって付加されたものであるという見解が示されている。

『心月輪秘釈』〈先徳御釈〉已下の文一本に之れ無し。流布の本には後人之れを書き加へるなり。根来の古本には別紙に之れを書きて、草子の末に牒付するなり。憲師此の文を載せるにはあらず。憲公の委しく『心月輪秘釈』を見るべきの指勸を思ひて、後人委しく之れを加へるなり。⁽³³⁾

このように、長谷寺の学僧である豊山第二十四世信恕能化（一六八五―一七六三）（以下、信恕）は、以上のように『大疏第三重草子見聞記』（以下、『草子見聞記』）において述べており、聖憲が類聚した時点には『秘釈』の引用はなく、付加されていない写本も存在していたようである。しかし、根来寺に関係する何者かによって添

付資料というかたちで伝えられ、後に流布本として伝わったものには本文の中に組み込まれていたという経緯を考えることができる。

そして、信恕は同じく『草子見聞記』において法身法爾の三色について以下のような解釈を示している。

「法身法爾の三色」とは、本有の三色なり。是れは第三重の無相、『疏』第六に「畢竟空は無相にして一切相を具す」と云ふ。直に諸法は識に約して其の心も亦た是れなり。（中略）往に看よ。法爾の三色は仏見にして、凡見に能はずなり。³⁴

このように、色相を現出する本有の立場と理解することができ、四重秘釈でいうところの第三重の「無相の有相」に相当するものであると考えていることがわかる。そしてこれらは、既に我執を離れており、あくまでも衆生の立場としてではなく、仏の立場からの見方であるので、法身大日如来としての色相を認めることができるのであるとしている。

五 まとめ

以上、『秘釈』における翻刻校訂本文の確定の経緯から、現存諸写本の再確認。訓読注釈研究の検討といった問題に端を発し、『秘釈』本文における考察、具体的には「三密」と「三色」についての異同による本文解釈の相違についてみてきた。

そして、これらの異同関係について後世の学匠たち、特に頼璩を中心に『秘釈』に対するその引用態度を検討し、根来・新義門流の学僧が用いた『秘釈』の本文について考察を加えた。そこからみえてきたものは、彼らがみていた『秘釈』本文は三密ではなく三色であったことは確定的であるといえる。また、各写本、版本の情報

を勘案すると流布した『秘釈』は三色のほうが多数であったのではないかと考えることができる。

文献学研究における翻刻校訂本文の確定は慎重を期することは勿論のこと、常に原本資料に今一度当たることの重要性を自戒の念として肝に銘じ、森を把握するためには一本一本の木々を丹念に見ていく作業が重要であると痛感する所存である。

しかし、本稿も『写本集成』所載の諸写本を見ることができたわけではなく、また多くを翻刻校訂本文や訓読・注釈といった先行研究に依るものである。真言宗学としての「教学を再考」し、「伝統を創造」していくということは、連綿と引き継がれてきた諸師先徳の教学活動の所産を継承しつつ、それらを常に再確認していくという作業を一つ一つ積み重ねていくことにより成立するのであろう。

〈キーワード〉『心月輪秘釈』 三密 三色 覚鑊 頼瑜

註

- (1) 加藤精一「伝統教学の展望について」『密教学研究』四二号、二〇一〇年、三頁。
- (2) 覚鑊撰『心月輪秘釈』（富田敦純校訂『興教大師全集』下巻、宝仙寺、一九七七年再版、（以下、『興大全』）下巻、一〇七五頁）
- (3) 覚鑊撰『心月輪秘釈』（『興大全』下巻、一〇七五頁）
- (4) 覚鑊撰『心月輪秘釈』（『大正蔵』七九卷、四二頁、中段）
- (5) 覚鑊撰『心月輪秘釈』（『大正蔵』七九卷、三五頁、脚注）
- (6) 「凡例」真言宗智山派編『興教大師覚鑊写本集成』三巻、法蔵館、一九九七年、（以下、『写本集成』）三巻。
- (7) 北尾隆心「解題」『写本集成』四七〇～四七一頁。
- (8) 『写本集成』三巻、三一六頁。
- (9) 『写本集成』三巻、三五二頁。
- (10) 覚鑊撰『心月輪秘釈』（『大正蔵』七九卷、三九頁、上段）
- (11) 児玉幸多編『くずし字用例辞典』普及版、東京堂出版、二

『心月輪秘釈』における三色について

- 〇〇八年新装一七刷。
- (12) 東京大学史料編纂所・奈良文化財研究所、二〇〇九年、『電子くずし字字典データベース』・『木簡画像データベース』木簡字典』連携検索、http://clioz39.hutokyo.ac.jp/ships/ZClient/W34/z_list.php?title=%E5%AF%86&resourceurlp%00
- (13) 「凡例」宮坂宥勝編『興教大師撰述集』上・下巻、山喜房仏書林、一九八九年、増補訂正第一刷、(以下、『興大撰』)五頁。
- (14) 「凡例」『興教大師著作全集』五巻、真言宗豊山派宗務庁、一九九三年、(以下、『興著全』)一頁。
- (15) 覚饒撰『心月輪秘釈』(『興大全』下巻、一〇五九頁)
- (16) 覚饒撰『心月輪秘釈』(『興大撰』二五四～二五五頁・興著全』五巻、八〇～八一頁)
- (17) 空海撰『即身成仏義』(『弘大全』一輯、五一三頁)
- (18) 覚饒撰『心月輪秘釈』(『興大全』下巻、一〇五一頁)
- (19) 伝空海撰『秘蔵記』(『弘大全』一輯、四〇～四一頁)
- (20) 覚饒撰『心月輪秘釈』(『興大全』下巻、一〇五一頁)
- (21) 空海撰『声字実相義』(『弘大全』一輯、五二七頁)
- (22) 空海撰『声字実相義』(『弘大全』一輯、五二七頁)
- (23) 空海撰『声字実相義』(『弘大全』一輯、五二七頁)
- (24) 空海撰『声字実相義』(『弘大全』一輯、五二八頁)
- (25) 杲宝撰『大日經疏鈔』第一末二、巻十三(『続真全』六巻、三三四頁、下段)
- (26) 杲宝撰『大日經疏鈔』第一末二、巻十三(『続真全』六巻、三三五頁、上～下段)
- (27) 杲宝撰『大日經疏鈔』第一末二、巻十三(『続真全』六巻、三三五頁、下段)
- (28) 頼瑠撰『菩提心論初心鈔』巻下「三摩地段」(鈴木版『日藏經』四八巻、一一七頁、上段)
- (29) 頼瑠撰『菩提心論墨草』第三(『続真全』二二巻、一〇八頁、上段)
- (30) 頼瑠撰『菩提心論墨草』第三(『続真全』一一巻、一〇八頁、上段)
- (31) 頼瑠撰『顯密問答鈔』巻下(『続真全』一三巻、四〇頁、下段～一九頁、上段)
- (32) 聖憲撰『大疏百條第三重』巻十「心法色形」(『大正藏』七九巻、七五六頁、下段～七七七頁、上段)
- (33) 信想撰『大疏第三重草子見聞記』第十(『豊山全』五巻、七九六頁、上段)
- (34) 信想撰『大疏第三重草子見聞記』第十(『豊山全』五巻、七九六頁、上段)

